

邵廷采と全祖望（下）

早坂俊廣

キーワード：邵廷采、全祖望、章学誠、梁啓超、明清期寧紹地域

序 章 問題の所在

第1章 姚江書院の思想史

第2章 邵廷采の位置(1)～思想史のなかで～【以上、「前稿」¹⁾】

第3章 邵廷采の位置(2)～歴史叙述をめぐって～【「本稿」はここから】

3-1. 梁啓超の邵廷采評価

3-2. 邵廷采の「姚江書院伝」

3-3. 邵廷采に於ける「理学」と「史学」

第4章 全祖望の邵廷采批判(1)～一族の記録をめぐって～

4-1. 全祖望の語る邵氏

4-2. 邵廷采の語る全氏

4-3. 全祖望の語る全氏

第5章 全祖望の邵廷采批判(2)～冬青の役をめぐって～

5-1. 邵廷采の「冬青の役」論

5-2. 全祖望の「冬青の役」論

5-3. 「全祖望の記録」再考

終 章 その後の邵廷采

第3章 邵廷采の位置(2)～歴史叙述をめぐって～

前稿は、「姚江書院の思想史」を確認し、そこに於ける「邵廷采の位置」について検討をおこなった。それは、思想史的な文脈のなかで邵廷采の理学思想／本性論を検討する内容であった。それに対し、本稿は、邵廷采の歴史叙述を主に取り上げることになる。また、それに係わる全祖望の邵廷采批判を取り上げることで、両者の学風の相異についても検討する。前稿で述べた如く、邵廷采は、「半世紀ほど後に生まれた全祖望（1705～1755）から、その学問のあり方を酷評された一方で、百年近く後の生まれである章学誠（1738～1801）からは絶賛を受けた」²⁾点に特色があるのだが、全祖望も章学誠とともに、主に彼の歴史叙述（史学）について酷評／絶賛を加えていたわけなので、本論文は、かなり長い遠回りの果てに本題に入ることになる。ただし、全祖望の邵廷采批判を扱う前に、さらに遠回りをして、梁啓超の邵廷采評価について前もって確認しておくことにする。梁啓超による邵廷采への好意的な評価は、やはり章学誠の影響を大きく受けており、その評価ポイントの明確さが示唆に富

¹⁾ 早坂俊廣「邵廷采と全祖望（上）」、『信州大学人文科学論集』第9号（第2冊）、2022年

²⁾ 前稿 p. 21

んでいるからである。

3-1. 梁啓超の邵廷采評価

滝野邦雄氏は「清朝思想史における邵廷采」という論考に於いて、「邵廷采は陽明学の左右兩派の人物から学んでいたといえる」と述べたうえで、

梁啓超（1873～1929）は、そうした邵廷采のことを、「康熙のはじめ、浙東の陽明学は、ほぼ沈国模と黄宗羲との兩派の対立する状況となった。……³ [そうしたなかで、邵廷采は] 兩派を始めて一つにした」（梁啓超『中国近三百年學術史』五 陽明学派之余波及其修正）と言う。

しかし、邵廷采の「後蒙説」などには陽明学右派が重視した「工夫」に基づいた学問観が説かれている。これなどは（中略）敬服する劉宗周の考えによっている。そしてこの「工夫」が、邵廷采の史学思想に大きく影響している。⁴

と論じている。梁啓超の述べているような「兩派の対立」という理解には注意が必要である点、及び、仮にこれを「陽明学と劉宗周学との対立／統合」という意味に限定するにしても、それは邵廷采に於いて「始めて」成し遂げられたことではなく、姚江書院自体がずっと取り組んできたテーマであると言える点については、前稿を参照されたい。ここでは、中国近代の思想家・政治家である梁啓超が邵廷采を極めて高く評価していた点を確認しておくに留めるが、邵廷采に対する梁啓超の高評価⁵は、歴史叙述に関する領域に於いてこそ顕著である。例えば、王陽明の伝記に関する以下の文章からも、それはうかがえる。

我々は、『明史』本伝を読むだけでは、学术界における王陽明の地位を知ることは出来ない。最も良いのは、邵廷采の『思復堂文集』と『明儒学案』の「姚江学案」とを対照しながら読むことで、そうすれば、どこが優れていてどこが劣っているかが分かるだろう。『明儒学案』は学術面に偏っており、政治方面を語る事が少ないけれども、これはもちろん「学案」スタイルによるもので、致し方ないと言える。ただ、黄宗羲は、近傍の人の事績を多く著録しているのに、陽明に関しては特に簡単に済ませているので、これは彼の良くない点である。陽明は関連する事項が非常に多く、学問も事功も記載する価値があるのに、『明儒学案』は事功の部分をずいぶん捨ててしまっているのだから、[そこでの陽明は] ほとんど一人の生粋の学者になってしまっている。…現存する「王陽明伝」のなかでは、邵廷采の作品がとびぬけて良いと言える。[この作品の記載を]

³ この部分の中略は、滝野氏の論文に従っている。梁啓超の原文では、この中略部分に「魯公の孫である邵念魯（廷采）は韓孔当から学を受け、さらに黄梨洲から算術を学んだ。念魯は最も長く姚江書院の講座を引き継ぎ主導した」という趣旨のことが書かれている。また、その直後には「思うに、陽明の同郷の後輩で、その学問を盛んにすることができたのは念魯が殿将であるが、その史学を兼ね修めたのは黄梨洲の教えである」とも記されている。この梁啓超の指摘は示唆に富むと思われるので、ここに補足しておく。なお、私が使用したテキストは、『梁啓超論清学史二種』（復旦大学出版社、1985年）p. 151である。

⁴ 滝野邦雄「清朝思想史における邵廷采」（『経済理論』226号、1988年）pp. 24-25

平均してみると、学問が三分の二を、功業が三分の一を占めている。学問を述べている部分も、要点を抽出できている。宋学が勃興した後の学問の変遷、陽明自身の特色、当時の学术界に於ける地位、及び末流への伝播まで、すべてしっかり記述できている。最後に、『旧唐書』の書式を用いて、二編の文章を著録している。一篇は、陽明を孔子廟に配祀することに関する申時行の上奏文であり、一篇は湯斌が陸隴其に答えた書簡である。彼は陽明を弁護しようとしているわけではないけれども、その趣旨は自然と明らかである。功業を述べている部分は、『明史』よりもかなり簡潔であるけれども、まさしく「事柄は前よりも多いのに、文章は旧来よりも省かれている」と言えるだろう。…『明史』は繁雑であって要を得ておらず、邵氏の簡潔さには及ばない。これはひとえに、「史才」「史識」の高低によるものである。⁶

梁啓超は『中国歴史研究法』のなかで、劉知幾と章学誠の議論をふまえ、「史家の四長」、すなわち「史徳」「史学」「史識」「史才」について詳述している。このうち、「史識」は「歴史家の観察力」⁷、「史才」は「歴史を専門的に記す技術」であり、「史徳があれば資料を誠実に収集しようとし、史学があれば研究の遂行に多大な労力は必要とせず、史識があれば観察眼が極めて鋭敏となる。だが、〔史才が無ければ〕精美な歴史を書き記すことはやはりできないのだ」⁸という。鋭敏な観察眼と巧みな文才という点で邵廷采が高く評価されていることが分かる。

また、梁啓超は、「邵廷采の『思復堂文集』は「文集」と名乗っているものの、その7～8割が「歴史著作」である」と指摘したうえで、その特色について、以下のように評している。

頁数は多いとは言えないものの、毎篇ともある種の意義を体現している。そのうちの「合伝」はもちろん一人にとどまらないが、「専伝」もまた多くの人物を含んでいる。「王門弟子伝」「劉門弟子伝」「姚江書院伝」「明遺民所知伝」等の諸篇は、どれも体裁が極めて優美である。全書が散篇に属しているけれども、奥底には系統性が自ずと備わっていて、しかも各篇がどれも非常に洗練されている。我々の模範としてよいものである。⁹

ここで「専伝」と呼ばれているものは、ある個人の伝記であり、その代表例が、先ほど言及した王陽明に関する伝記である。「合伝」については、

⁵ 梁啓超の邵廷采評価については、何冠彪「邵廷采三題—柴德賡〈跋《邵念魯年譜》〉訂誤」（『明末清初學術思想研究』、臺灣學生書局、1991年）、邢舒緒「邵廷采の史学」（『邵廷采与姚江書院派研究』第二章、浙江大学出版社、2016年）を参照した。

⁶ 梁啓超『中国歴史研究法』（東方出版社、1996年。初版は1922年）pp. 211-212。

⁷ 同前 p. 173

⁸ 同前 p. 177

⁹ 同前 p. 216

学術上、宗教上、芸術上で一つのまとまりを成しているものについては、「合伝」となすべきである。例えば、「姚江王門弟子伝」「戴山劉門弟子伝」などは、邵念魯の作品であるが、極めてよく出来ており、両派の学風を見て取ることができる。¹⁰

と述べられていることから分かるように、ある学派・集団・系譜に関する伝記である。邵廷采の「合伝」に対して、梁啓超の評価がとりわけ高いことが見て取れよう。以下では、前稿のおさらいを兼ねて、「姚江書院伝」という「合伝」について確認しておこう。

3-2. 邵廷采の「姚江書院伝」

邵廷采は、この文章の冒頭で簡潔に南宋思想史を回顧し、「浙東は金華の數君子¹¹の後を承け、名儒接いで出づ。正徳嘉靖の際、道統は陽明に萃まる」という形で明代思想史へと接続させている。そして、王陽明の良知説に言及した後、「其れ朱子の存心致知の教えと、二有る蔑きなり」と述べつつも「然れども是の時に當り、禪門盛行し、門人は師説を謹持する能わず」とも指摘する。以上のような前口上を受けて、姚江書院に関する記述が始まる。

崇禎年間の末、沈・管・史の諸公が姚江書院を立ち上げ、陽明の学を講じた。彼らは皆、志節を確立し、道理に循い善に安住することができたため、世間では朱子学における金氏許氏¹²と並び称した。崑崙山の頂点に到達して天の川の流れに身をゆだねたわけではない〔すなわち、仏教の最高峰・本流に属したわけではない〕けれども、「その末流にかかわりながらも溺れるには至らなかつた」と要約できるだろう。（崇禎末、沈管史諸公特起姚江書院、講陽明之學。其人皆能嚴立志節、循理處善¹³、世以輩金許之於朱。雖未涉崑崙之巔、傾雲漢之波、要亦涉其末流、不至於溺焉者。／「姚江書院傳」¹⁴）

その後、姚江書院に於ける師資相承の様が「合伝」の形で記述されていく。個々の伝記の主人公について、その名前と素性に関する部分だけ抽出しておこう。

- (1) 沈求如先生、諱國模、字叔則、餘姚人。
- (2) 管霞標先生、諱宗聖、字允中、餘姚人。
- (3) 史拙修先生、諱孝咸、字子虚、宋太傅浩之後也。
- (4) 韓遺韓先生、諱孔當、字仁父、餘姚人。沈求如先生弟子。
- (5) 金如王公、諱朝式、山陰人。

¹⁰ 同前 p. 221

¹¹ 南宋末から元にかけて現在の浙江省金華市を拠点に朱子学の正統を伝えたと言われる「金華四先生」（何基、王柏、金履祥、許謙）のこと。彼らについては、早坂俊廣「『婺学』・場所の物語」（宋代史研究会研究報告第7集『宋代人の認識—相互性と日常空間—、汲古書院、2001年）を参照されたい。

¹² 前注にある金履祥と許謙を指す。

¹³ 『論語』學而篇に「子貢曰、貧而無詔、富而無驕、何如。子曰、可也。未若貧而樂道、富而好禮者也」とあり、朱熹の注に「好禮則安處善、樂循理、亦不自知其富矣」とある。

¹⁴ 全集 p. 71。前稿に倣い、邵廷采の引用は「全集」とのみ表記する。なお、「姚江書院傳」は「全集」の上冊にも下冊にも収録されているが、本稿では上冊（『思復堂文集』）の頁数のみ記すこととする。

- (6) 禹氏、諱元璞、…奠維、諱錫元、皆餘姚人、沈求如先生弟子。
- (7) 長孺邵公、諱元長、餘姚人、沈求如先生弟子。
- (8) 吾之兪公、諱長民、餘姚人、沈求如先生弟子。
- (9) 大父魯公先生、諱曾可、字子唯。

もちろんこの10名の事績のみが記されているわけではなく、それぞれの箇所において、関連深い人物たちが附記されている。まさしく「合伝」であるが、それぞれ長短はあるもののおおむね数百字程度の伝記が並べられている。

なお、(3)の部分には「弟孝復、字子復、號退修」に関する記述も含まれているが、これについては前稿で取り上げた¹⁵⁾ので、ここでは詳論しない。ただ、彼に対する扱いが極めて淡泊であった点については繰り返し触れておきたい。逆に、比較的長く熱のこもった記述になっているのは、やはり(9)である。この邵曾可（注3の引用文に所謂「魯公」）についても前稿で言及したので、ここでは、前稿で触れていない事跡を抽出しておこう。

姚江書院が設立された当初、餘姚には〔姚江書院のことを、世事に疎い〕「道学」と目する者がおり、家人はみな疑いの目を向けていた。〔わが大父の邵魯公〕先生は色を成して「こうでなければ、人生を虚しく送ることになる」と言い、すぐに駆け付けて従学した。毎月初めにある書院の会合では、受講生はそれぞれ御託を並べ、まるで訴訟沙汰のようであった。先生だけは襟を正して厳肅な佇まいで、あたかも言葉が話せないかのようにであったが、退室して問答の様子を書き出し、具体的に思索して精緻に選択して、問答の状況と〔その記録とが〕合致するよう努めた。…そこで、みな〔自らを〕恥じて〔先生に〕心服した。（時書院初立、姚中有道學之目、家人咸以爲疑。先生厲色曰、不如是、便虚此生。徑往從之。月旦院會、請業者各持成見、殆同紛訟。先生獨正襟斂容、如不能言。退而書所答問、近思精擇、期於動息有合。…於是皆愧服焉。）

最初は、主敬の工夫を専ら行っていたが、後には深く致知へと進んだ。…二人の子供に儒学書を読ませ、高明賢良なる人に近づかせ、身を持することを純朴にさせて、漫然と經世濟民に思いをはせることが無いようにさせた。嫡孫〔の私〕は、幼いころ、王陽明の「客座私祝」や邵康節の詩句、『朱子家礼』を〔先生から〕受講し、「必ず聖人となれ」との言葉を授かった。道が家で行われ、交遊は誠実なものであった。順治16年（1659）11月卒す。享年51歳。（初年、功專主敬、後乃深詣致知、…教二子讀儒書、近高賢、持身渾樸、莫漫馳思經濟。冢孫幼受陽明客座私祝、康節詩句、朱子家禮、語之以必爲聖人。道行於家、交遊信之。順治十六年十一月卒、年五十一。¹⁶⁾

また、邵曾可が明儒の書を多く蔵していたことや、邵廷采が『姚江書院志略』を増補修訂する際に、典拠資料はすべて邵曾可の遺品の箱から出ていること等も記されている。「姚江書院伝」の末尾には「癸未、遺韓門人邵廷采謹識」との記載があるが、「癸未」とは康熙42年（1703）、邵廷采56歳の時である。

¹⁵⁾ 前稿 p. 38

¹⁶⁾ 全集 p. 77

3-3. 邵廷采に於ける「理学」と「史学」

私の拙い要約と翻訳では、邵廷采の「史徳」「史学」「史識」「史才」を窺い見ることは難しいが、ここでは、彼の〔現代語の意味での〕「史学」の才能が、その「理学」思想とどれほどの関連性があったのかという点について、簡単に見ておこう。

滝野邦雄氏は、「邵廷采における史学」という論考に於いて、

邵廷采は、そこでいわゆる客観として存在するものは、われわれ個人個人の間で成立する「確信（確かめ）」ではないかとする。人間にとって道とは、相互の関係において納得されたものではないのだろうか、と考えるのである。…そして、この「確かめ」という意識は、絶えず聖人にむかってなされていき、徐々に深められていく。聖人に同一化するまで不断に続けられていくのである。／このように道の認識のために、聖人との間で自己を確認する。これが心を中心としながら客観的に認識を行おうとする邵廷采の方法ではなかったのか。¹⁷

と論じておられる。ここでの「確信（確かめ）」という表現は難解であるが、邵廷采が、聖人の学と史学とを連続するものとして捉えていた、と滝野氏が理解しておられることは確かであろう。滝野氏の「邵廷采にとって歴史の著述は、単なる歴史的事実の羅列ではない。「誠」に基づいた「知行合一」を、つまり哲学を示すものであった。その点が、章学誠の非常な共感を得たところではないだろうか」という指摘¹⁸からも、そのことはうかがえる。

ただ、邵廷采の史学／歴史叙述に対して、性理学の知的伝統が直接的・理論的に影響を与えた、ということは無かったように思われる。前稿で「22歳で諸生となり、科挙試験に従事することになったが、これは『向上の功夫』ではないという思いから葛藤を抱え、長らく進歩がなかった。性分から喜んで明代の歴史を書き写し閲読していたが、師による導きが無かったため、日時を空しく費やすこととなった。だが、本性の一筋においては幸いにも先師韓子に侍ることができた。先生は月の終わりに会合して、沈史両先生の講席を引き継いでおられた」という邵廷采の言葉を引用した¹⁹。ここに明らかなように、彼に於いて本性論と歴史学とは微妙に乖離していたのではないだろうか。もちろん前稿で検討したように、彼は本性論に対し真摯に取り組んだので、それによって彼自身の徳性が涵養されたのかも知れない。そして、それによって、彼の「史徳」や「史識」が涵養されたということも十分あり得るだろう。だが、性理学と歴史学とは、邵廷采に於いて、これはこれ、それはそれ、という扱いであったと私は考える。

あるいは、次のような言い方が出来るかも知れない。前稿に於いて、私は、

邵廷采は、「致知」についても「誠意」についても、姚江書院の知的伝統からは微妙

¹⁷ 滝野邦雄「邵廷采における史学」（『経済理論』250号、1992年）p. 25

¹⁸ 滝野邦雄「邵廷采の思想形成」（『経済理論』227/228号、1989年）p. 37

¹⁹ 前稿 p. 31で引用。原文を再録すれば「二十二爲諸生、從事舉業。以爲非向上功夫、此意扞格、久不進。益性喜抄閱明史、然無師指授、空自勞攘。而本性一道、幸侍先師韓子、月季再會、重續沈史之席。」（全集 p. 325）である。

にずれた形で解釈を施し、そうすることで朱王劉三者の思想を「統合」「折衷」した。しかし、それは、些か弛緩した／希薄化された「統合」「折衷」であったと言える。

と述べ、さらに「邵廷采がとり着いたのは、先人たちが到達していた思想的熱量をあえて棄却したうえでの「統合」であり「折衷」であった」「邵廷采に於いて王陽明や劉宗周の癖を正し灰汁を抜く形で学知の転換がなされた」と評価した²⁰。ここで、この評価をあえてプラスの方向で捉え直してみるならば、「癖を正し灰汁を抜く」ことによってある種の汎用性を獲得した学知が、歴史叙述の方面でその本領を發揮し始めた、と言えるのではないだろうか。一つの仮説として、この点をここに提示しておきたい。

次章からは「全祖望の邵廷采批判」と題しているが、主眼は引き続きこの「歴史叙述」という点にある。議論の力点は全祖望へと移行するが、邵廷采の歴史叙述の実相にも迫ってみたい。

第4章 全祖望の邵廷采批判(1)～一族の記録をめぐる～

全祖望の邵廷采批判ということで最も有名な資料は、彼の「答諸生問思復堂集帖」であろう。この文章の冒頭で全祖望は、

最近の文士はほとんどが「知らずに作る」²¹者たちである。例えば邵念魯がこの文集をこしらえたのは、先儒を表章し忠孝の士を發揚しようと強く望んだものであり、その意図は良い。しかし読書が極めて少なく、固陋な学究の胸中で草卒に筆を振ったものだから、間違いだらけになってしまった。後世の者がその文集を読み、それに依拠したならば、間違いが多く残ることになるだろう。（近來文士、大半是不知而作、如邵念魯爲是集、其意甚欲表章儒先、發揚忠孝、其意最美、然而讀書甚少、以學究固陋之胸、率爾下筆、一往謬誤。後生或見其集而依據之、貽誤不少。²²）

と述べ、計14条の「間違い」を列挙し修正を加えている。こういった批判に対して、例えば清末の学者・李慈銘のように、全祖望の言い分を半ば認めつつも邵廷采の優れた点をも指摘する立場もあった。

『思復堂集』を読む。全謝山は、邵念魯を浅薄な読書人だと誇り、たびたびその間違いを指摘している。念魯は、学問の蓄積に乏しく、その学問は確かに謝山の到達点には及ばないが、その文章の切れ味の良さは、謝山の到底及ばないものである。／同治4年（1865）11月18日。（閱思復堂集。全謝山譏念魯爲學究、頗挾摘是謬誤。念魯胸膈儉隘、其學問誠不足望謝山津涯、而文章峻急、則非謝山所及。／同治乙丑十一月十八日）²³

²⁰ 前稿 p. 39及び p. 41

²¹ 『論語』述而篇に「蓋有不知而作之者、我無是也」とある。

²² 『鮚埼亭集』外編 p. 1161。全祖望の資料はすべて『鮚埼亭集』からの引用である。本稿では、詹海雲校注『全祖望《鮚埼亭集》校注』（國立編譯館主編／出版）を使用し、以下では、書名は省略して「内編」「外編」の別、巻数と頁数を記すこととする。

これに対し、むしろ全祖望の側に事実誤認が存することを指摘する論者も多くいたようである。例えば、現代の研究者である何冠彪氏は、「書全祖望〈答書生問《思復堂集》帖〉後」という論文²⁴において、過去の議論の蓄積を踏まえた総括的な検討を行っている。何氏は、邵廷采の末裔である邵晋涵（1743-1796）の「邵廷采先生が世を去って60年になるが、郷里でその姓氏を知る者はほとんどいない」という言葉を引き、その原因が全祖望の邵廷采批判にあると述べたうえで、論文執筆の意図について、「筆者はこの文章を撰して邵廷采のために弁明を行い、併せてこの機会を借りて、二百年以上に及ぶこの公案を決着させたい」²⁵と率直に述べている。何氏の具体的な考証については省略するが、全祖望の事実誤認を一つ一つ指摘して「邵廷采のために弁明を行」い、最後には、全祖望の過誤を批判する論者を数多く列挙したうえで、「全祖望は博学を自慢して前賢時彦を誣告したけれども、以上の論者は彼に対する大いなる諷刺となっている」²⁶という皮肉でもって文章を締め括っている。

本稿では、このような議論の蓄積を踏まえつつも、これまでほとんど言及されてこなかった論点を中心に、全祖望の邵廷采批判を論じていきたい。

4-1. 全祖望の語る邵氏

邵廷采と全祖望の関係性を考えるうえで、非常に興味深いこととして、双方ともに相手方の一族、族人に関する文章を著している点があげられる。例えば、全祖望は、邵以貫という人物について、「邵得魯先生事略」という文章を残している。その冒頭には、以下のような記載がある。

先生は姓が邵氏、諱が以貫、字が得魯、浙江餘姚県の人である。邵氏は姚江の望族のなかで孫氏・謝氏・王氏・陳氏に次ぐ存在であり、最も盛んな一家である。先生は若い時期からその兄・以發と並び称されたが、先生はとりわけ清廉であった。その当時、陶文覚公石梁の学問が盛行しており、姚中の沈求如、史子虚、蘇存方らはその高弟であったが、密雲円悟の禅宗をそこに混入していた²⁷。先生も彼らと交流したけれども、独自に実践を積み、有用の学を探究した。（先生姓邵氏、諱以貫、字得魯、浙之餘姚縣人也。邵氏於姚江族望中、爲孫謝王陳亞、門材最盛。先生少與其兄以發齋名、而先生尤狷潔。當是時、陶文覺公石梁之學盛行、姚中沈求如、史子虚、蘇存方其高弟也、顧頗參以密雲悟之禪。先生亦從之遊、而獨事躬行、講究有用之學。²⁸）

さらに、邵以貫が、黄宗羲の弟である黄宗会²⁹と交友があった点などに触れ、黄宗会の「邵得魯は甲申以後、頬に涙の痕が無い日はなかった。笑みを浮かべるのは遊山の時ぐらいで

²³ 李慈銘『越縕堂讀書記』（上海書店出版社）p. 998

²⁴ 何冠彪『明末清初學術思想研究』所収。

²⁵ 同前 p. 233

²⁶ 同前 p. 284

²⁷ この箇所については、前稿を参照されたい。

²⁸ 内編卷26 pp. 609-610

²⁹ 黄宗會、字は澤堂、浙江餘姚の人。『縮齋詩文集』（華東師範大学出版社）参照。

あった（得魯自甲申後、輔頰間無日不有淚痕、其稍開笑口者、則遊山耳³⁰）」という言葉を用いている。「甲申」とは崇禎17年（1664）のことで、明王朝の崩壊を意味している。このように、邵以貫が遺民として生きた事実を紹介したうえで、全祖望は、邵以貫の「族人である邵廷采は『明遺民所知伝』という作品を作っているながら、先生に一言も触れていない。これは驚くほど奇怪なことであり、理解できない（族人邵廷采作明遺民所知傳、亦不及先生一語。咄咄怪事、不可曉也³¹）」と切り捨てている。

邵以貫という一族の先人について、邵廷采が知らなかったのかと言えば、そのようなことはないはずである。例えば、これまで何度か言及した「姚江書院伝」のなかで、一箇所だけではあるが、邵以貫の名があげられている。それは俞長民という人物の伝記部分であるが、そこでは、

沈求如、史子虚の両先生が没した後、高弟の張客卿、蘇玄度、邵以貫らも相次いで逝去して、姚江書院は衰微し、仏教臨濟宗が盛んとなった。高明な者たちはあっさりと臨濟宗の門をくぐってしまい、口を極めて道学を罵り、儒者を敵扱いするようになった（沈史兩先生没、諸高第弟子張客卿、蘇玄度、邵以貫等相繼逝、姚江書院中微、而釋氏臨濟宗大盛。高明者輒往濟宗門下、争詈道學而仇視儒者。³²）

という形で、邵以貫の名があげられている。前稿との関係で言えば、邵廷采が「沈求如や史子虚の没後間もなくして姚江書院で禅宗が流行するようになった」と考えていたのに対し、全祖望は黄宗羲と同様に「沈・史たちの時点で既に禅宗が姚江書院に流れ込んでいた」としている点が興味深くはあるけれども、ここでは、邵廷采が邵以貫の名を自己の著述中に記していないわけではなかった、ということを確認するとどめておく。問題は、邵廷采が「明遺民所知伝」（梁啓超が賞賛した「合伝」の一つである）のなかに、邵以貫の事績を書き留めなかったのは何故なのかという点にあるが、それはもはや知りようがない。「知ってはいたが、記さなかった」ということだけは明らかであるが、これが、全祖望の言うように「咄咄怪事」なのかどうかは定かではない。ただ、要するにこれが邵廷采のスタイルである、ということは言えるのではないだろうか。この問題については後に再び取り上げることにし、次に、邵廷采が著した全氏の記録を検討することとする。全祖望との対比に於いて、邵廷采のスタイル、その特長がより明らかになるであろう。

4-2. 邵廷采の語る全氏

全祖望は鄞県の人であり、全氏のなかでも「桓溪全氏」の属である。それに対し、邵廷采が著した全氏の記録は「山陰全氏」に関するものである。全祖望はこちらの一支について「東浦全氏」と呼んでいるが、邵廷采の「全氏譜序（壬午）」「全氏譜後序（壬午）」という二編の文章がその記録である。「壬午」とは康熙41年（1702）のことで、邵廷采55歳のときである。もちろん、全祖望はまだ生まれていない。邵廷采がこれらの文章を執筆したのは、

³⁰ 内編卷26 p. 610

³¹ 内編卷26 p. 611

³² 全集 p. 76

「全氏の裔孫である闇生氏がその祖系を考証したので、私は氏を訪ね、それを見せてもらった³³」のがきっかけである。闇生の名は煒、始祖である「全衡」から数えて十八世、この年に75歳となっており、邵廷采とは山陰東浦で知り合った³⁴とのことである。

邵廷采が記す全氏の歴史は、概略、以下のようになる。

- ①古に「全」姓は見当たらず、漢の王恒徳が王莽の災禍を避け銭塘（杭州）に逃れた際、父・王崇の字（字は全節）を用いて改称した。これが全氏の始まりである。
- ②南宋・光宗の時に、全衡が銭塘から山陰（紹興）に移った。彼が山陰全氏の始祖である。
- ③全衡の孫である全義は、財産を投げ打って救済事業に取り組む人士であった。
- ④全義の末子が全大節であるが、彼の娘は宗室に嫁ぎ、生まれた二人の息子のうち、兄は後の理宗³⁵であり、弟のほうも後の度宗³⁶の父親となった。
- ⑤全大節の兄である全大中の孫娘も、度宗に嫁した。

このように、山陰全氏は南宋末期の宗室と緊密な関係を有していた。この点に関し、邵廷采は、「宋朝の外戚世家については、山陰の全氏が最も隆盛を誇った。その興廢は、理宗・度宗・恭宗の三帝と軌を一にしている（有宋外戚世家、山陰全氏爲最。興廢之跡與理度恭三帝相終始）」と述べたうえで、

私は『宋史』を閲読して感じ入ったのだが、太祖から太宗への継承に正義が欠けていた³⁷ために、災禍は〔北宋滅亡を招いた〕靖康の変にまで続き、天罰はますます熾烈になった。韓世忠と岳飛が百戦し、江左の士人を激励して臨安を奉じたけれども、結局その継嗣を維持することができなかった。皇天はひそかに助けを出し、趙徳芳と趙徳昭の系統に帝位を嗣がせ、それぞれ三世に及んだ³⁸。それ故、全氏は一保長の立場³⁹で聖嗣をひそかに育み、理宗だけが長きにわたって国を治めることとなった。五人の君主が帝位を引継ぎ、合わせて六十年に及んだ。これは天の采配であって、国を開いて代々継承していくことが、どうして人力に関わろうか。平らなままで傾かずにいるものなどなく⁴⁰、春が栄えた後に秋の衰えが待っているのは、必然の趨勢であって、怪しむには及

³³ 「裔孫闇生考其祖系、余索而觀之。」（『全氏譜序（壬午）』、全集 p.307）

³⁴ 同前 p.308。なお、地方史検索ソフトを活用しても、この全煒なる人物を探し出すことは出来なかった。

³⁵ 理宗：趙昀（1205～1264）、南宋の第5代皇帝。父は趙希璠。母は全氏。初名は与莒、後に貴誠と改名。寧宗危篤の折、宰相の史彌遠の工作により皇子となり、昀と改名。寧宗の没後に即位した。「端平更化」と称される理学（道学）に基づく政治を行ったが、やがて政治に対する情熱を失い、姦臣の専横を許した。賈貴妃の弟である賈似道を右丞相にすると、彼が政治の実権を握った。皇后は謝氏（謝皇后）。息子はおらず、度宗は養子。以上、『岩波世界人名大辞典』（以下『岩波』と略称）p.1646を参照。

³⁶ 度宗：趙禔（1240～1274）、南宋の第6代皇帝。父は嗣榮王趙与芮（理宗の弟）。母は黄氏。理宗に息子がいなかったため、養子（皇子）となり、理宗の没後に即位した（1264年）。元軍の脅威が迫っていたが、政治は宰相の賈似道に任せて酒色に溺れ、有効な対処ができず、要衝の襄陽（現、湖北襄陽）を元軍に攻略されて、翌年、没した。皇后は全氏。『岩波』p.1650を参照。

³⁷ 宋太祖（趙匡胤）の没後に弟の趙匡義が即位したため、彼が兄を謀殺したという説が存する。『岩波』p.1652を参照。

ばない。全氏は当初、隆盛を極め、公正勤勉で廉潔な暮らしを送っていたけれども、時を同じくして賈貴妃の弟である賈似道⁴¹が寵愛をよいことに政務を独占し、やりたい放題して正義を滅ぼしてしまった。ただ明順皇后⁴²の一族だけは、天子の外戚であることによって驕り高ぶったという話を聞かなかった。もともと趾壯の凶⁴³が無いのだから、剥牀の戒め⁴⁴にかなり達していたわけである。だから、終盤に衰えたとしても、大辱は及ばないのである。これが、〔明順皇后の系統が〕他宗と特に異なる点である。造物者に虧益謙の報いがあることは、もちろんすでに明らかである。（余覽宋史、感於太祖太宗之際、授受不得其正、禍延靖康、厥罰彌烈。韓岳百戰、棒江左之士以奉臨安、卒不克保其似續。皇天陰相佑、啓德芳德昭之後繼統、各延三世。故全氏以一保長潛毓聖嗣、理宗享國獨久。五主傳祚、共六十年。斯蓋天之所與、承家開國、豈繫人力。無平不陂、春榮之後受以秋落、數理固然、其何足怪。而全氏始居盛隆、已能公勤廉約。同時賈貴妃弟似道恃寵專政、怙侈滅義。獨明順之族不聞以威畹貴驕稱。本無壯趾之凶、頗達剥牀之戒。是以晚際陵夷、大辱不及、與他宗特異。造物者虧益謙之報、固已徵矣。／邵廷采「全氏譜序（壬午）」、全集 pp.307-308）

と論評している。そして、南宋末期に外戚として栄盛を極めた山陰東浦全氏も、元初には離

³⁸ 南宋初代皇帝である高宗までは太宗の系譜で継承が行われていたが、高宗が実の息子を幼くして亡くしたため、次の孝宗（趙昚）から皇統は太祖系に戻るようになった。孝宗・光宗・寧宗と三代続いた後、同じ太祖系ながら別の血筋に属する理宗（趙昀）が即位し、その後に度宗・恭宗と同じく三代続いた。宋朝趙氏の系図については、小島毅『中国思想と宗教の奔流 宋朝』（『中国の歴史7』、講談社学術文庫、2021年）p. 63を参照。ただし、小島氏は、「恭宗」という呼称を用いていない。また、高宗から孝宗への譲位についても同書 p. 143を参照した。

³⁹ 邵廷采「全氏譜後序（壬午）」（全集 p. 309）に「三子大節爲保長、女贅宗室香璣、生與莒與茵。與莒入繼大統、是爲理宗」とあり、全祖望「東浦全氏祠堂碑文」（外編卷14 p. 304）に「故東浦一支、亦府君之裔孫也。七傳爲太保唐公安民、八傳爲太傅越王份、九傳爲太師申王大中、太師徐公大節、特進大聲。徐公即宋史所稱保長者也。」とある。

⁴⁰ 『易経』泰卦「九三、无平不陂、无往不復」。本田濟氏は下線部を「およそ平らかなままで傾かずにいるものがあるか。安泰の時はいつまでも続きはしない。」と解している。同氏『易 上』（朝日新聞社、中国古典選1）p. 140。

⁴¹ 賈似道（1213～1275）、南宋の権臣・収蔵家。台州（浙江省）の人。以上、『中国文化史大事典』（大修館書店、以下『文化史』と略称）p. 139を参照。

⁴² 邵廷采「全氏譜序（壬午）」（全集 p. 307）に「季子大節産慈憲夫人、育理宗皇帝於民間。又一傳大中女孫明順皇后、配體度宗、兩世后戚。」「全氏譜後序（壬午）」（全集 p. 309）に「明順太后隨其子德祐帝之燕、終於尼寺。」とある。

⁴³ 『易経』大壮卦「初九、壯于趾。征凶、有孚」。本田濟氏は「趾に壯んなり。征くときは凶、孚有り」と訓読し、「趾は足首から下の部分をいう。人体の一番下にあつて、進み動くもの。故に、趾に壯ん一趾に元気があるといふことは、進み動く意欲旺盛なことを象徴する。ところで初九は…最下位にありながら壯んに進むというのは身の程を知らぬ破滅の道である」と解説されている。同氏『易 下』（朝日新聞社、中国古典選2）p. 33。

⁴⁴ 『易経』剥卦「初六、剥牀以足、蔑貞凶」。本田濟氏は「牀を剥するに足に以ぶ。貞を蔑ろにす、凶」と訓読し、「陰が陽を剥するのは下から起こる。初六はその剥の始まり、土台はすでに浸蝕され、寝ている牀まで剥落してしまった。…邪が正を滅ぼそうとしているが故に凶」と解説されている。同氏『易 上』（朝日新聞社、中国古典選1）p. 223。

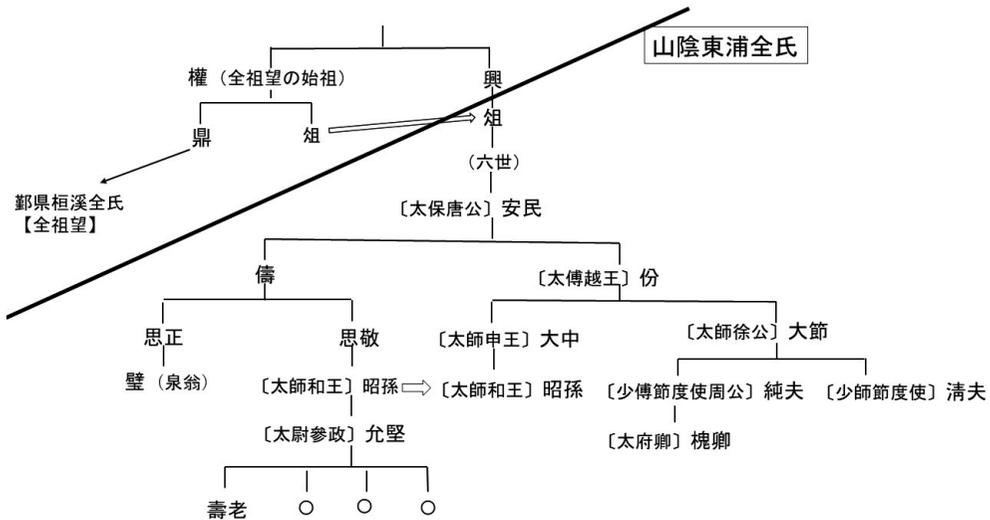
散の憂き目に遭い、12世を経てやっと東浦に戻ることができた。現在の紹興・寧波・杭州にも全氏はいるけれども、この東浦の全氏が大宗である。邵廷采は、このようにも述べている⁴⁵。

4-3. 全祖望の語る全氏

このような邵廷采の著述と真っ向から対立するのが、全祖望の考証である。邵廷采の名前を掲げて批判している資料として、次のものがある。

近年、我が家の東浦の族譜が散佚してしまっていた。姚江の学究である邵廷采はそれを勝手に整理したのだが、申王を和王とし、和王を昌王とし、申王の父である全份を全義とするなど、どれも甬上（寧波）の族譜と合致しないものである。幸いにも劉後村の文集に著録されているものが、甬上のものと同じであるので⁴⁶、邵氏の妄言を斥けて東浦に関する過ちを訂正することができた。（近日、吾家東浦譜系散失、姚江學究邵廷采妄敘次之、以申王爲和王、以和王爲昌王、以申王之父份爲義、皆與甬上宗乘不合。幸賴後村集所錄、與甬上同、得以斥邵氏之妄、而正東浦之譌。／全祖望「先太師申王告身跋」【原注】、内編卷36 p.864）

この「申王を和王とし」云々については、話が入り組んでくるので、まずは、全祖望の著述⁴⁷を参考にして、彼の理解する山陰東浦全氏の系譜を図示しておこう。



山陰東浦全氏系図

⁴⁵ 「東浦里第賜自理宗朝、元初流散、十二世始復歸浦…與浦分宗者、山陰環埭柘林、別居鄞者曰光溪、居仁和者曰蕪橋。紹寧杭三郡皆有全氏、而東浦爲大宗。」（邵廷采「全氏譜後序（壬午）」、全集 p.310）

⁴⁶ 劉後村とは劉克莊（1187～1269、南宋の詩人）のこと。彼の文集である『後村先生大全集』を紐解いてみたが、全祖望が具体的に何を踏まえてこのように述べているのかを確認することが出来なかった。後の課題としたい。

⁴⁷ 本稿で引用した資料群のほかに、内編卷36に収める諸「告身跋」の類も参考にした。

この図を踏まえつつ、前節で述べた邵廷采の「全氏」論に対し、全祖望に成り代わって反駁していきたい。

①で邵廷采は、全氏はもともと「王」姓であったと述べていた。しかし、全祖望は、「吾が全氏は、『周礼』泉府の後に出て、官職名を氏とした。その後、「[泉]と」「全」とが同じ発音なので音通した」と述べ、全氏の本姓が「王」であったという説には根拠が無いと断じている⁴⁸。

②で山陰全氏の始祖が全衡であると邵廷采は述べていたが、全祖望は、それを「全組」であるとする。また、これと関連して、全組の叔父である全興に息子がいなかったため、全組がその後を嗣ぐことになったわけだから、東浦全氏ももとをただせば、鄞県桓溪全氏の始祖たる全権（全組の父、全興の兄）の末裔、そこからの分支であると言える、とする⁴⁹。

③に関しては、全衡も全義も、全祖望の資料にはその名が見えない。

④⑤全大節の父は全份であると全祖望は述べている。また、この全份（太傅越王）の子、全大節（太師徐公）の兄が全大中（太師申王）で、大中の子が全昭孫（太師和王）である、とする⁵⁰。

前に引用した「姚江の学究である邵廷采は…申王を和王とし、和王を昌王とし、申王の父である全份を全義とするなど、どれも甬上（寧波）の族譜と合致しない」という全祖望の非難に関しては、邵廷采の文章に即して確認しておこう。ここでは、

趙宋になってから錢塘の全衡が初めて錢塘江を渡り、山陰の宝盆に居を構えた。その孫である全義は望煙樓を建て、慈善事業に励んだ。第三子の全大節は保長となり、その娘が宗室の趙希璪に嫁して、与莒と与芮を生んだ。与莒は皇統を継ぎ、後の理宗となった。与芮は福王に封ぜられ、福王は後の度宗を生んだ。全大節の仲兄である全大中も、その孫娘が度宗の後となった。皇后の貴戚という理由で全氏に加恩がくだされ、全義が越王に、全大中が和王に追封された。継父である全昭孫は、生前に淮西に出向して昌王に封ぜられた。理宗が即位され、外祖父に当たる全大節は太師越国王に封じられ、その二子にも少師節度の官が与えられた。…一時代の栄遇を極めたと見えよう。（入趙宋、有錢塘全衡始渡浙、家山陰之寶盆。其孫義建望煙樓、好務賑施。三子大節爲保長、女贅宗室希璪、生與莒與芮。與莒入繼大統、是爲理宗。與芮封福王、福王生度宗、而大

⁴⁸ 「吾全氏、出自周官泉府之後、以官爲氏。其後以同音通於全。…或曰、全之本姓爲王、漢元后之族屬、以避新都之亂易姓如輔果。或曰、殷王高宗之後爲全。先公考正世譜、謂二說皆無據。」（全祖望「桓谿全氏祠堂碑文」、外編卷14 p. 302）

⁴⁹ 「會稽東浦全氏、吾鄞之小宗也。全氏自大司馬以後、世居錢唐。…侍御府君仕於宋、與其弟卜居會稽浴龍橋旁。已而以其長子爲明州學錄、來鄞、遂家桓溪。其弟無子、府君以次子爲之後、故東浦一支、亦府君之裔孫也。」（全祖望「東浦全氏祠堂碑文」、外編卷14 p. 304）。ちなみに、ここで「大司馬」「府君」と呼ばれているのが全権で、「其弟」が全興、「次子」が全組である。

⁵⁰ 「唐公子爲太傅越王份、越王子爲太師申王大中、太師徐公大節。徐公即宋史所稱保長者也。申王子爲太師和王昭孫、是爲度宗元舅。…和王子爲太尉參政允堅、周公子爲太府卿槐卿。而福王之妃、亦出於全。」（全祖望「桓谿全氏祠堂碑文」、外編卷14 p. 303）、「八傳爲太傅越王份、九傳爲太師申王大中、…申王子爲太師和王昭孫、徐公子爲少師周公純夫、少師節使清夫。和王子爲太尉參政允堅、周公子爲太府卿槐卿。是時理宗之母、度宗之后、福王之妃、皆出全氏。」（全祖望「東浦全氏祠堂碑文」、外編卷14 p. 304）

節仲兄大中女孫爲度宗皇后、以皇后貴加恩全氏、追封義爲越王、大中爲和王。後父昭孫前死事於淮西、封昌王。理宗立年、封外祖父大節爲太師越國王、二子官少節節度。…可謂極一時之榮遇。／邵廷采「全氏譜後序（壬午）」、全集 p. 309)

と記されている。下線を引いた部分（④⑤に相応）が、全祖望の主張とは齟齬を来たしており、「妄言」という非難を招ききっかけになったのであろう。また、前節末尾で引用した「紹興・寧波・杭州の全氏の大宗が東浦全氏である」という邵廷采の記述も、全祖望の自負（「會稽東浦全氏、吾鄞之小宗也」）からすれば、大いに気に入らないものだったろう⁵¹。

前節で述べたように、邵廷采は全氏の族人である全燁なる人物から示された族譜にもとづいて論述を行っていた。全祖望の非難が提出された時には既に邵廷采はこの世にいなかったわけであるが、もしその非難を耳にしたならば、「それはとんだ言いがかりであって、間違いがあったとしても、それは同族内の問題なのであり、自分の関知するところではない」と反駁したくなかったことであろう。だが、全祖望によれば、「他家の碑板を作成する際には、世系について必ず考証を行うべきであり、その家の子弟が述べることを妄信してはいけない。子弟の述べることには牽強附会が含まれるかも知れないからである（大家作人碑板、其於世系、必有考證、不肯妄信其家子弟所述、以其家子弟所述、或出附會也）」とのことである。この言葉は、「辨吾家啓東墓志世系與厲樊榭」という、明代の詩人である陳繼⁵²が記した全氏の家系の間違いを、友人の厲樊榭⁵³に対して全祖望自ら説明している書簡に記されたものである。全氏の家系に対する邵廷采の「誤認」には、前史があったということであろう。長い引用になってしまうが、次章の内容にも大きく関わる論点を含むため、この厲樊榭に宛てた書簡を訳出しておく。

墓志は陳怡庵の作であるが、吾が全氏の系譜に附したその序文に、「太師和王昭孫の後については、和王は太尉保信軍節度使永堅⁵⁴を生み、太尉は養高処士柏壽を生み、処士は綿竹令の璧を生み、綿竹は晟を生んだ。全晟、字は啓東。世々盤屋（現在の西安市周至県の旧称）に居したが、宋の南遷に伴い、會稽に居宅を構えた。養高処士の代になって蘇州に遷った」と記されている。…

吾が家は西漢の時には国都を離れ、東漢の末になって錢塘に居を構えた。これ以後、三国から六朝にかけては、史伝で考証可能である。唐から五代にかけては、不明な点はやや存するものの、みな錢塘に居しており、盤屋〔に居したわけ〕ではない。先侍御公（全権）が初めて錢塘から甬上に遷り、その弟（全興）は初めて甬上から山陰に分居した。これは、太平興国年間に当たり、南渡に伴ったわけではなければ、錢塘から會稽に

⁵¹ 注49を参照。もちろん、これは「祠堂碑文」なので、邵廷采批判として著されたものではない。

⁵² 『明史』巻152列伝第40に「陳繼、字嗣初、呉人」として伝記が載っている。引用文に言う「陳怡庵」のことである。

⁵³ 厲鶚、字は太鴻または雄飛、号は樊榭。1692（康熙31）～1752（乾隆17）。清の詩人。『文化史』p. 1283を参照。

⁵⁴ この人物に関しては、資料によって「允堅」と記されている場合があり、前掲の図に於いても「允堅」と表記した。

遷ったわけでもない。山陰の宗支については、六世先太保唐公安民の長子を儔といい、儔が思正を生んだ。思正の子を璧といい、この璧が月泉吟社で泉翁と呼ばれている者である。思正の弟を思敬といい、この思敬が太師和王昭孫を生んだ。泉翁と和王的関係は、つまり同祖の兄弟であり、〔全璧を全昭孫の〕曾孫と見なすのは間違いである。太保（全安民）の次子が太傅越王份であり、份が太師申王大中を生んだ。申王には子がいなかったため、和王がその後を継いだ。和王が太尉を生んだ。太尉に四人の息子がおり、その一人が壽老である。〔墓誌に〕所謂「柏壽」とは、おそらく壽老の名を間違えたものであろう。泉翁は、壽老にとって族祖である。しかも泉翁は宋の直秘閣に居て、その後に自ら「遯初子」と名乗って、謝皋羽⁵⁵と唱和し合った仲である。一体どうして元朝に仕え、いきなり綿竹令という官職を授かったりするだろうか。思うに、徳佑丙子（徳佑2年／至元13年／1276年）、太尉は三宮に付き随って燕に入ったが、そのことは『元史』に載っている。その子孫はみな北に移っていて、南に帰ったということは聞いたことがない。一体どうして、いきなり養高處士という者が呉下（蘇州）に居ることなどあり得よう。泉翁が宋朝滅亡の後に杭州に移り住んだことは、戴剡源⁵⁶が「城東處士」と呼んでいることから、確実に考証できることである。さらにどうして呉に住むことなどあろうか。

陳怡庵の述べていることは、一つとして正しいものがない。わたしは、だから呉下の一支の話も捏造であり、和王からそれが出ているということも怪しいと考える。もし本当に和王から出ているのであれば、自らの世系を知らないはずがないからである。近年、吾が家の越中の宗譜は散佚してしまったが、幸運なことに甬上の宗譜が小宗に関する記録も附録しており、それを『劉後村集』に載っている制詞と突き合せたならば、合致しない点がなかった⁵⁷。ただ、わずかに十世までしか載っていないため、壽老以下については含まれていないけれども、この十世分があれば、和王と泉翁とが〔同祖の〕兄弟であることは明確である。

（志乃陳怡庵所作、其序世系曰、太師和王昭孫之後、和王生太尉保信軍節度使永堅、太尉生養高處士柏壽、處士生綿竹令璧、綿竹生晟、字啓東。世家整屋、隨宋南遷、居會稽。養高處士始徙於蘇。…

吾家自西漢時出京兆、至東漢之季、已居錢塘。由是而三國、而六朝、史傳可考。而唐、而五代、稍隱約。然皆居錢唐、非整屋也。先侍御公始由錢唐遷甬上、其弟始由甬上分居山陰、在太平興國間、非隨南渡也、亦非由錢塘竟遷會稽也。山陰之支、六世先太保唐公安民之長子曰儔、是生思正。思正之子曰璧、月泉吟社所稱泉翁者也。思正之弟曰思敬、是生太師和王昭孫、泉翁于和王、蓋同祖兄弟也、而以爲曾孫、舛矣。太保之次子曰太傅越王份、是生太師申王大中。申王無子、故和王爲之後。和王生太尉。太尉四子、其一曰壽老、所謂柏壽、殆因壽老而譌也。泉翁之於壽老乃族祖。且泉翁在宋直秘閣、其後

⁵⁵ 謝翱（1249～1295）、字は皋羽、号は晞髮子、南宋の詩人。『岩波』p. 1191。

⁵⁶ 戴表元（1244～1310）、字は師初・曾伯、号は剡源、中国宋末元初の儒者、文人。現在の浙江奉化の人。以上、『岩波』p. 1549を参照。なお、戴表元が全璧のことを「城東處士」と呼んだ事例を発見することができなかった。待考。

⁵⁷ 注46を参照されたい。

自稱遜初子、與謝舉羽相唱和、亦何嘗仕元、而忽加以綿竹令之官乎。蓋自德佑丙子、太尉扈三宮入燕、見於元史、其子孫皆北徙、不聞南歸、安得遽有養高處士者居吳下乎。若泉翁自宋亡後遷杭、剡源稱爲城東處士、是則確然可考者、又何嘗居吳也。

怡庵所述、無一是者。吾故疑吳下一支之冒託、未必出於和王也。若果出自和王、不應不知其世系矣。近來吾家越中譜已散失、猶幸甬上譜附志小宗、以質之劉後村集所撰制詞、無不合者。然所載僅十世而止、故自壽老以下不及焉。賴有此十世者、和王與泉翁之爲兄弟昭然也。／全祖望「辨吾家啓東墓志世系與厲樊榭」、内編卷34 pp. 810-812)

「4-2」で論じたように、邵廷采は東浦全氏に属する者から見せられた記録に基づき、東浦全氏を本宗として扱った。だが、鄞県桓溪全氏に属する全祖望からすれば、それは、看過できない事実誤認だったわけであり、ここでも、その点が力説されている。

ただ、ここでは、それ以上に、全璧（泉翁）なる人物をめぐる事実確認に、ずいぶんと意が注がれているように読める。この人物については、次章に於いて大きく取り上げることとなるが、背景の確認だけはここで済ませておく。先に、外戚として盛衰を経験した東浦全氏に関し、「明順皇后の系譜だけが驕っていなかった」と邵廷采が述べていたことを紹介した。おそらく全祖望は、このことに対しても強い反感を覚えたことであろう。これは、明順皇后の系譜以外はみな奢っていた、とも受け取れる記述だからである。そして、これに対する反証になり得る存在が、全璧なのであった。

予告の通り、その検討は次章になるが、ここでは、「外戚としての東浦全氏」という点に関して若干の補足をしておきたい。次に掲げるのは、全祖望の「鵲巢碑記」という文章である。ここには、邵廷采の名は出て来ないけれども、また、そこで紹介されているのは、東浦全氏ではなく桓溪全氏にまつわる「美談」ではあるが、そこでは、外戚として隆盛を誇った同宗の別支に対する複雑で微妙な彼の感情を存分に見て取ることができる。

この文章で全祖望は、寧波府城から「南四十里」の距離にある桓溪洞橋近辺の地理、及び自らの一族がそこに「八百餘年」居住してきたことについて述べた後、「鵲巢碑」と呼ばれる水門の名の由来について、以下のように語っている。

碑（水門）に「鵲巢」と名付けたのは何故か。南宋期、理宗を生んだ慈憲太妃、度宗の仁安皇后、福王与芮の夫人はみな吾が宗の山陰の一支から出たが、その祖系は実は鄞（の全氏）から出ている。帝位に就く前の理宗は、余魯公天錫の家で学ぶ際に、桓溪にある祖父母の家を訪ねて、飲食を共にした。即位した後、推恩し官爵を下賜しようとしたが、徴士府君の兄弟八人⁵⁸は、みな辞退して受けなかった。朝議はこれを高く評価し、八人の中から二人を選び、汝梅・汝霖というその二人を皇族女子と結婚させた。さらに、碑の上に宮闕の如く二本の樹木を植えて、ここが后妃の出自であることを示させ

⁵⁸ 詳細は解明できていないが、全祖望の「桓溪全氏義田記」（外編卷21 pp. 441-442）では、全権の次子が紹興に移り、「九傳爲穆陵之母家、以龍潛之恩、三世並列五等。又一傳爲邵陵之后家」となったこと、そして「桓溪全氏」についても、全権から「九世孫八人以上」が推恩の対象になりかけたものの、宗子である「菽和府君諱汝梅」が「吾以天時人事觀之、宋社殆將屋矣、況有志之士亦不肯由戚畹邀恩澤也」と訴え、「遂戒其兄弟弗出」という結果となったことが述べられている。

た。嗚呼、外戚は多くいるが、…富貴を貪り求め、顕栄の者になびき従って、歴史に汚点を残してきた。だが、吾が祖先は、王後の榮譽をぼろ靴のように見なした。どうして、塵埃に満ちた世の中を洗い清める者でないことがあろうか。そこで、城南の人々は、我が家を「鵲巢⁶⁰全氏」と呼んだのである。（鵲巢何以名碑。宋時理宗所生慈憲太妃、度宗仁安皇后、福王與芮夫人皆出吾宗山陰一支、顧其祖系實自鄞。而理宗潛龍、學於余魯公天錫之家、因訪外氏於溪上、嘗飲食焉。既而即位、推恩並賜官爵、而徵士府君兄弟八人、皆辭不受、朝議高之、乃於八人中選其二、曰汝梅、曰汝霖、尚縣主、而爲樹雙闕於碑上焉、以見其爲后妃之自出也。嗚呼、戚畹多矣、…苟邀富貴、依草附木、貽穢舊史。而吾祖視楡翟之寵榮、有如敝屣⁵⁹、豈非矚然塵世之表者歟。於是城南之人呼吾家曰鵲巢全氏。／全祖望「鵲巢碑記」、外編卷21 p. 440）

このような全祖望の「全氏」論を見るにつけ、全祖望が邵廷采をあれほど批判した理由の一つに、一族の記録をめぐる不満、恨みつらみがあったのではないかと考えてみたくなる。特に、外戚としての全氏に対する評言に関しては、そのように感じられてならない。ここまで引用する機会が無かったが、邵廷采による以下の論評に対しても、全祖望は大いに不満であったことだろう。

楊璉真伽は南で六陵をあばき、理宗はその頭蓋骨すら保つことがなかった。丹書盟券は、空しくも何の役にも立たなかった。何とも悲しいことである。君主の寵愛に長く留まることができず、喜びと悲しみを共に過ごしたとしても、「臣下が権勢をほしいままにして美食に耽れば、お前の家を害しお前の国に凶をもたらす」のである。このことは、わが身を顧みる鏡とすることができよう。（楊璉真伽南發六陵、理宗且不保其顛骨、丹書盟券、空復何用、哀哉。貴寵之不能久居、體同休戚、人臣有作福作威玉食、害於而家、凶於而國⁶¹者、可爲明鑒。／邵廷采「全氏譜後序（壬午）」、全集 p. 309）

前半部分の内容は、次章の主要テーマであるので、ここでは読み飛ばしていただいて構わない。後半部分の嘆息めいた非難については、全祖望であれば「否、少なくとも鵲巢全氏は無関係だ」と言うところであろう。ここでは、とりあえず「少なくとも」と限定を付けておいたけれども、次章の内容からすれば、この限定自体、不要なものかも知れない。「塵埃に満ちた世の中を洗い清める者」は、山陰東浦全氏のなかにもいた。そういった全祖望の主張を、順を追ってみていこう。

⁵⁹ 『孟子』盡心上篇に「舜視棄天下、猶棄敝屣也。」とあるのを踏まえる。

⁶⁰ 『詩経』国風召南「鵲巢」の詩を踏まえる。目加田誠氏は、この詩を「高貴な姫の婚礼を祝する歌」と解説し、その「維鵲有巢、維鳩居之。之子于歸、百兩御之。」という一節を「鵲の巢に／雌鳩がはいる／お姫様のお輿入れ／車百輛おん迎え」と訳す。また、「雌鳩がはいる」という部分について、「女性が夫の家に嫁ぐことを興する」と注釈を加えている。目加田誠『詩経・楚辞』（平凡社、中国古典文学大系15）pp. 12-13。

⁶¹ 『書経』洪範篇に「惟辟作福、惟辟作威、惟辟玉食。臣無有作福作威玉食。臣之有作福作威玉食、其害于而家、凶于而國。」とある。

第5章 全祖望の邵廷采批判(2)～冬青の役をめぐって～

私は以前、次のような文章を記したことがある。長い引用になってしまうが、行論の都合上、煩を厭わず引用することにする。

——南宋王朝が滅び、江南地方もモンゴル軍の支配下に置かれつつあった「ある時」に事件が起きた。楊璉真珈^{ようれんしんか}という僧侶が、南宋の皇帝の陵墓を暴き金銀財宝を強奪するという暴挙をおこなったのである。この事件について、『元史』卷二〇二で、以下のように説明されている。

楊璉真珈という者がいた。世祖が重用して江南釈教総統の地位につけていた。彼は錢塘・紹興にある宋の皇室趙氏の諸陵、および大臣の塚墓を、百一ヶ所もあばいた。平民を四人も殺し、数えきれないほどの美女や宝物の賄賂を受けた。さらに人々から奪いとった財物は、合計で金が千七百両、銀が六千八百両、玉帯が九、玉器が大小合わせて百十一、雑宝貝が百五十二、大珠が五十兩、紙幣が十一万六千二百錠、田が二万三千畝におよび、ひそかに平民をおおいかくし、公賦をおさめないようにした者は、二万三千戸を数えた。その他の隠匿してまだ露見していないものは、ここでは論じない。（原脚注：訳文は、野上俊静『元史釋老傳の研究』（朋友書店、一九七八年）四六頁に拠る。ただし表記を常用漢字に改めた。）

この事件に対し、ささやかなレジスタンスが即座に、そして密やかにおこなわれた。「何人かの義士」たちが密かに皇帝の遺骨を奪回し、それを手厚く葬った後で、その場所に目印として「冬青樹」（日本名はナナミノキで、モチノキ科に属する）を植えたのである。この義挙は「冬青の役」とよばれ、これ以後、多くの学者の歴史考証の対象となっただけで、詩や戯曲などの題材にも頻繁に取り上げられるようになる。確かに、事件は異民族統治下の悲哀を端的に表すものであり、義挙はそのような状況下における筋の通し方の、ひとつの模範たり得るものである。「模範」といういい方が気に入らない方でも、なかなかできるものではない勇氣ある行動であるということには同意いただけるであろう。

ところで、直前の説明で、「ある時」に「何人かの義士」が義挙をおこなったと説明した。混乱の最中にひそかにおこなわれた行動であるだけに、いつ誰がおこなった義挙であるのか確定が難しく、多くの学者が様々な意見を提出している。——⁶²

引用は以上である。拙文のこの部分は、万斯同の『南宋六陵遺事』という著述に関するものであるが、ここにいわゆる「冬青の役」について、邵廷采・全祖望ともに著述を残している⁶³。また、ここでも、全祖望は邵廷采を名指しで批判している。二人の個性の違いを明確にしてくれる議論であるので、詳しく見てみたい。

⁶² 早坂俊廣「思想の記録／記録の思想—寧波の名族・万氏について—」、小島毅監修・早坂俊廣編『文化都市 寧波』、東京大学出版会、2013年、pp.172-173)

⁶³ 万斯同（1638～1702）、字は季野、浙江鄞県の人。邵廷采の生卒年（1648～1711）と比べると、邵よりも10歳年長である。寧波出版社刊『萬斯同全集』第一冊に「南宋六陵遺事」が収められているが、その「編輯點校説明」（p.527）によれば、「この書に附された序文がすべて康熙庚辰三十九年に著されているので、この書が京師修史後期に編集されたことが分かる」とされる。「康熙庚辰三十九年」は西暦1700年、万斯同63歳の年に当たる。

5-1. 邵廷采の「冬青の役」論

邵廷采は、「書會稽宋陵始末」という文章のなかで、楊璉真加の悪行に触れた後、以下のように述べる。

故宋將監簿であった山陰の王英孫は、家財を投げ出して羊豕のお供えをし、唐珏・林景熙・鄭宗仁たちを招き自分の意向を伝えて豪少らを糾合させ、「我らはみな宋人である。陵墓があばかれ晒されていることには耐えられない。遺骨を回収して埋葬すべきだ。これは千年に及ぶ痛恨事である。書儒に謀りごとは無理であり、諸君ら義烈の士でなければできないことである」と語った。感じ入った一同は承諾し、そのまま道を分かち山に入り、夜にまぎれて遺骨を回収した。蘭亭山の天章寺に埋葬して、冬青樹を標識として植えた。理宗の頭蓋骨だけが回収できなかったが、それは先に楊璉真加が遺骨を持ち去り、飲器として使用していたためである。数日後、楊璉真加はその他の骨をもって渡江し、南宋の故宮に白塔を築いた。牛馬の骨と一緒に穴に埋め、「鎮南」と銘打った。杭州の人々はむせび泣き、仰視することができなかった。（故宋將作監簿山陰王英孫、出家財、具羊豕、使客唐珏林景熙鄭宗仁等以己意召會豪少、謂之曰、吾輩皆宋人、不忍陵蛻之暴露、當取他骨易歸。此千載惋痛事、書儒不足謀、非君等義烈士不可。衆感諾、遂分路入山、夜收遺骨、葬蘭亭山天章寺、植冬青樹爲識。惟理宗頭不得、先爲真伽取去、截其頂爲飲器矣。後數日、真伽取散骨渡江、即宋故宮築白塔、雜牛馬枯骼共穴、名曰鎮南。杭人悲咽、不忍仰視。／邵廷采「書會稽宋陵始末」、全集 pp. 478-479）

邵廷采はさらに、発陵から82年後に元朝が滅んだこと、明の洪武元年（1368）に使者が派遣されて、飲器になり果てていた理宗の頭蓋骨が奪還されたこと、義を好む越の後人たちによって、義挙の首謀者である唐珏と林景熙を祀る「雙義祠」が会稽県学の名宦祠の左に建てられたこと、嘉靖26年（1547）に知県の張鑑によって宋六陵の傍らに「雙義祠」が建て直され、毎年、六陵と祠に対し祭事が行われていること等を解説している。さらに季本⁶⁴の文章を引用して、六陵に関して唐珏と林景熙ばかりが祀られて謝翱・鄭宗仁・王英孫たちが祀られないのは「風教を司る者の闕典」であるという彼の意見を紹介している。

以上で、レジスタンスの首謀者・同調者の名がおおむね取り上げられたことになる。では、それはいつ実行されたのであろうか。邵廷采はこの文章のなかで、「乙酉八月、寧宗理宗度宗及び楊后四陵を發^{あば}き、其の寶器を取る」「十一月、又た徽高孝光四帝、孟韋邢吳謝五后の陵を發く」と記している。「乙酉」とは、至元22年（1285）である。これは、周密⁶⁵『癸辛雜識』に依拠したものであるが、邵廷采はさらに「案じて曰く、宋陵の發、傳聞に異辭あり」と述べ、陶九成『輟耕録』の「至元戊寅（乙酉の7年前、至元15年、1278年）」説にも言及している。こちらの説は、謝翱の詩「冬青樹引別玉潛」をその根拠とするものである⁶⁶。邵廷采は、この詩を根拠とする「至元戊寅」説を取り上げた後、異説も踏まえつつ考

⁶⁴ 季本（1485～1563）、字は明德、号は彭山。中国明代中期の政治家、儒学者。会稽の人。王守仁に師事した。以上、『岩波』p. 693を参照。

⁶⁵ 周密、字は公勤、号は草窓など。1232（紹定5）～98（大徳2）。南宋の詞人。祖籍は濟南（山東省）だが、曾祖父の代に宋の南渡に伴って吳興（浙江省）に移り住んだ。『文化史』p. 544を参照。

証をさらに進めていく。

さらに、次のような主張もある。丙子（至元13年、1276年）に元兵は江南に下り、その時から乙酉までほぼ10年になる。版図は既に定まっておき、法令も明らかなのだから、一体どうしてこのような事件が起こり得よう。だが、戊寅は丙子からわずか2年しか経っておらず、何事に於いても始まったばかりであるから、西僧はその間隙を縫って悪行を働いたのではなからうか、と。この言葉は、情理に達しないこと甚だしく、どうして大目に見ることができよう。そもそも元は宋の宮廟郊壇を尽く取り上げて、その宗室を遷そうとしたのだから、どうして陵墓など気に掛けることがあろうか。元時には稗史が忌避していたが、宋景濂⁶⁷になって初めてその事件が乙酉に起きたことを暴いたのである。（説者又謂、丙子元兵下江南、至乙酉將十載。版圖已定、法令已明、安得有此。惟戊寅距丙子纔二年、庶事草創、西僧或得乘間以行其惡。斯言何已恕而不達情理之甚耶。夫元悉宋宮廟郊壇、欲遷其宗室、何恤於陵。元時稗史避諱、至宋景濂始發其事於乙酉。／全集 pp. 481-482）

最後に、「度宗の庸愚さに合わせて、謝皇后が内で主導し、外で賈似道が補佐したため、忍びなくも令君父の頭蓋骨をひっくり返して飲器として使われるはめになってしまった」と指摘し、明の太祖の時に理宗の頭蓋骨を奪還させたことを褒め称えつつ、「ああ、後世の天下を支配する者は、行事の得失について、ここに学ばないわけにはいかないのだ」と文章を締め括っている⁶⁸。

また、邵廷采は、「宋遺民所知伝」という文章で、別の角度から考察を行っている。

宋六陵の事についても感慨深い。成化年間の華亭の人、彭瑋は宋濂の「書穆陵遺骼」を引いて、その歳が乙酉（至元22年、1285）であると断じているが、さらに疑うべき点はある。理宗の墓が八月にあばかれ、高孝諸陵が十一月にあばかれた。少し時間が空いているということは、遺骨を掘り出して埋め直すのにも先後があったことになる。前のことが露呈したら、後のことはますます難しくなる。唐珏と林景熙の行動は、果して同時だったのか、別の日時だったのか。高宗と孝宗の遺骨については、既にどちらも抜き取られていたと言われているが、林景熙が回収したのは誰の遺骨だったのか。唐珏が計

⁶⁶ 邵廷采は、「後人多據謝翱詩、以戊寅爲正」（『書會稽宋陵始末』、全集 p. 481）とする。この謝翱の詩には「知君種年星在尾」という一節がある。今関天彭・辛島曉著『漢詩大系十六 宋詩選』（集英社、1966年）に「冬青樹引別玉澗」の訓釈が収められているが、この一節については、「知る 君が種うる年 星の尾に在るを」と訓読し、「私は知っている。君がその木を植えたのは、星が尾宿にやどる年、つまり寅の年であることを」と翻訳している（p. 298）。この一節が「戊寅」説の論拠となり得ることは、この日本語訳からも理解できるが、邵廷采が「種年星在尾、或別有説、不可聽説」と慎重に述べている点には注意を要する。

⁶⁷ 宋濂、字は景濂。1310（至大3）～81（洪武14）。明初を代表する文臣・朱子学者。以上は『文化史』p. 760を参照。直後の引用で言及されている「書穆陵遺骼」は、『宋濂全集』（浙江古籍出版社）p. 547でも見ることができる。

⁶⁸ 「蓋以度宗之庸愚、而内主之以謝后、外輔之以似道、忍令君父之首、至於倒垂而飲器終也。…於乎、後之有天下者、行事之得失可無鑒於茲。」（全集 p. 482）

画に着手した時には、林景熙が先に高宗と孝宗の遺骨を回収していたわけではなからう。もしかしたら林景熙が回収したものは、唐珏が入れ替えた遺骨だったのかも知れない。論者は実行の年と遺骨回収の方法を考証するだけで、実施月の先後について考えようとせず、この事案について、結局、決着をつけることができないのである。…王修竹（英孫）を表章した者は、最初が黄潛であり、それを孔希普と趙子常（沔）が引継ぎ、季彭山（本）が集大成した。当時、遺骨の埋葬を主導しながら名を表に出さなかったのは、明哲保身ということであろう。唐珏と林景熙たちも修竹を愛し、彼のために憚っただけであり、名を表に出すことを嫌ったものではない。君主と朋友に対する信義は、どちらもこのように尽くされている。（余又感宋陵事。従成化中華亭彭璋引宋濂書穆陵遺骸、斷其歲爲乙酉、尚有可疑者。理宗陵發以八月、而高孝諸陵以十一月、相距幾一時、則易而瘞之亦有先後。前者事露、後者益難。不知唐珏林景熙之役、果同時耶、二時耶。高孝既稱俱蛻骨、而景熙所收者又何骨耶。豈唐方起謀、林已先得高孝兩陵骨耶。或林之所得、正唐所易之骨耶。論者止辨年之異同、收之分合、而不惟月之先後、斯案終未可定也。…表章修竹始有黃潛、申以孔希普趙子常、而集成於季彭山。當年主瘞陵而不居名、蓋明哲保身者。唐林等愛修竹、亦爲之諱、不以居名爲嫌。其處君友之義兩盡如此。／邵廷采「宋遺民所知傳」、全集 p.227）

以上の邵廷采の議論は、私のような者から見れば、非常に慎重に、精緻に考証を行っている印象を与えるものであるが、全祖望はそれを厳しく批判する。この件に関し、邵廷采を名指しして批判している箇所は、管見によれば、後にあげる一例のみであるが、全氏一族にまつわる議論がここには絡んでくるため、全祖望の舌鋒は鋭くならざるを得ない。

5-2. 全祖望の「冬青の役」論

前に引いた拙文において私は、冬青の役に関し、「混乱の最中にひそかにおこなわれた行動であるだけに、いつ誰がおこなった義挙であるのか確定が難しく、多くの学者が様々な意見を提出している」と述べた。全祖望の議論においても、この「いつ」「誰が」という問題が主眼となるが、さらに「どこで」という点、すなわち冬青樹が植えられた場所に関わる考証にも意が注がれている。

まず、「いつ」という点について、全祖望は、明確に「戊寅」説を採る。これは、黄宗羲や万斯同の主張を支持するものである⁶⁹。

羅雲卿は「唐雷門伝」を作り、〔冬青樹の義挙が行われたのは〕「戊寅」であるとした。周公謹（密）は「乙酉」と記し、宋景濂は周公謹に従ったが、『元史』では一年早めて「甲申」としているので、矛盾を来たしている。それゆえ『続資治通鑑綱目』は羅雲卿に従っている。謝臯羽（翱）の詩で照合したならば、「知る 君が種うる年 星の尾に在るを」とあるのだから、羅雲卿の言（戊寅説）が正しい。近人の邵廷采はそれに

⁶⁹ 邵廷采は、冬青の役に関する文章のなかで、黄宗羲・万斯同に全く言及していないので、もしかしたら二人の主張を知らなかったのかも知れない。これに対し、全祖望は明らかに両者の議論を踏まえて立論を行っている。

疑問を呈し、戊寅はまだ少帝の元年⁷⁰であり、モンゴルがこのように忌憚ないことをするはずがないと考えて「乙酉」を是とし、「冬青樹引」については理解できないので〔考察からは〕しばらく外すことにする、とした。〔宋朝が〕南渡したてのころには汴陵（開封）をもう維持できていなかったのに、ましてや崖山の如きちっぽけな土地⁷¹など、どうして敵が怖れることがあろうか。これは本当に迂儒の言であり、論弁するまでもないものである。發陵が起きたのは戊寅であり、その時にはまだ文丞相⁷²は死んでいなかった。（羅雲卿作唐雷門傳、以爲戊寅。周公謹志以爲乙酉、宋景濂從公謹、乃於其元史、又先一年、以爲甲申、則已自相矛盾。故續綱目從雲卿。若以皐羽之詩合之、知君種年星在尾、則雲卿之言是也。近人邵廷采疑以爲戊寅乃少帝元年、蒙古不應竟無顧忌若此、因以爲乙酉、而冬青引不可解、則姑闕之。不知南渡之初、汴陵已自不保、況崖山彈丸、豈爲敵之所思、是真迂儒之言、不足辨也。發陵既在戊寅、則其時文丞相未死。／全祖望「冬青義士祠祭議二與紹守杜君」、内編卷33 p. 778）

これが、全祖望が「冬青の役」に関連して邵廷采を名指しで批判している箇所である。果たして「迂儒」の一言で片づけられるような議論を邵廷采が行っていたのか、いささか疑問であるが、この点については後に改めて検討することとする。

次に「誰が」という点についてであるが、これは、全祖望にあつては「どこで」という問題が絡んでくる構成となっている。

六陵のことについては、まだ考証すべき点がある。唐珏と林景熙の故祠は〔陵墓のあった〕攢宮山の傍らにあるが、季彭山は、王修竹も祀られるべきだと主張した。これは張孟兼に基づく説で、一人増えたことになる。黄梨洲（宗義）は鄭朴翁と謝皐羽も祀られるべきだと考えたので、さらに二人増えたことになる。万季野（斯同）はさらに続けて、『癸辛雜志』にある陵使の羅銑も祀られるべきだと述べたので、もう一人増えることになった。羅銑の事績は唐や林と共謀したものではないようであるが、その義は同じなのであるから、一体でないと言うべきではない。…だから、全員まとめて「六義士祠」という名称で祀るべきである。…

その祠の位置については、再び攢宮山にというわけにはいかない。私の意見は、これを天章寺に移すべきである。…さらに検討すべき点がある。宋の蘭亭が天章寺にあったことは、王厚齋（応麟）の言で明らかである。今の蘭亭も天章寺にあるが、宋の蘭亭は今の蘭亭とは異なり、距離にして二里ほど離れているのだから、今の天章もまた宋の天章ではないのである。つまり、天章寺は元末に火災に遭い、明の永樂6年（1408）に浮屠の智謙が始めて重建した。位置の移動はこの時にあつたはずである。ならば、これよ

⁷⁰ 南宋の衛王趙昺の元号である祥興の元年（1278）のことを指す。

⁷¹ 原文「崖山彈丸」。『戦国策』趙策に「彈丸之地」という用例が見える。南宋の殘党が崖山（今の広東省）で元軍を迎え撃とうとして敗れ、南宋朝は完全に滅んだ。

⁷² 文天祥（1236～1283）、字は履善また宋瑞、号は文山。俘虜となった後、崖山に連行され、宋軍を招諭する文を作るよう求められるも拒絶。大都に護送され、4年に及ぶ拘禁の末に、至元20年に処刑された。獄中で作成した「正気の歌」で有名。以上、『文化史』p. 1083を参照。

り前の唐・林の義挙が旧地で行われたことは間違いない。だから、祠はやむを得ず今の天章寺付近に置くにしても、碑については旧址に建てるべきである。（六陵之事、尚有所商。蓋唐林故祠在攢宮旁、季彭山以爲尚應有王修竹、乃本之張孟兼、則多其一。黃梨洲以爲尚應有鄭朴翁謝臯羽、則又多其二。萬季野續考之、以爲尚應有癸辛雜志之陵使羅銑、則又多其一。羅事雖似不與唐林宿相謀、而其義則同、不可謂非一體也。…故當合而稱之曰、六義士祠。…若其祠址、既不復在攢宮。愚以爲可移之天章。…其中又有宜論定者。宋之蘭亭在天章、王厚齋之言可據也。今之蘭亭亦在天章、然而宋蘭亭非今蘭亭、相去幾二里、則今之天章亦非宋之天章也。蓋天章在元末爲火燬、明永樂六年、浮屠智謙始重建之、其遷地當在是時。然則前此唐林之舉、其在舊址無疑也。故祠或不得已而寄於今之天章、若碑則當立於舊址。／全祖望「冬青義士祠祭議與紹守杜君」、内編卷33 pp. 776-777)

このように、六人の義士について、せめて石碑だけでも宋の時に天章寺があった場所に建てるべきである、と全祖望は主張する。前に述べたように、ここで、全氏一族の歴史と「誰が／どこで」という問題とがクロスすることになる。

私がかつて「宋蘭亭石柱銘」を著し、そこで、度宗が天章寺の地を吾が家に賜ったこと、王朝交替の後になって始めてその地が書院となったこと、それは至元甲午（31年、1294）のことであることを記した。このことは、吾が家の世譜にははっきり出ているが、史志にはもちろん記載されていない。だが、戴剡源が蘭亭に遊んだ際に、書院の役務に関する序文を記し、「全氏の廬を以て之を爲す」と述べている⁷³のだから、その説に証拠が無いわけではない。

天章寺は宋の時から吾が家に属しており、至元甲午になって官府に返納したわけだから、宋の亡んだ翌年に起きた唐・林の義挙は、吾が家が共謀しなければ無理なことである。思うに、吾が祖先の泉翁はもともと遺民であり、王修竹と同志であった。それゆえ、この〔冬青の〕役は、他でもない、吾が家で行われたものである。…

ただし、六義士は崇祀されなければならないけれども、泉翁は必ずしもそうでないというのが、私の考えである。なぜならば、吾が家はもともと宋室の世戚であり、…国家が滅亡した際にそれを救えなかったことを後ろめたく思うことはあっても、一体どうしてこのこと（義挙に関与したこと）を功績として、後世にその報いを獲ようとしようか。しかも、天章は、故先太師徐公（全大節）の墓道が在った場所である。墓があった縁でそこを香火の院である寺にしたのだが、もちろんこれも宋室から賜ったものである。一盛りの土〔すなわち墳墓〕を辞退することなどあり得ないが、何か恐ろしい災禍があつて難色を示したとしたら、それは「厲にも之れし如かず⁷⁴」である。だから、泉翁が義挙を共謀したことは、奇とするには及ばないが、ただその土地の所属に関しては明

⁷³ 戴表元の文集『剡源文集』巻1「臨池亭記」に「臨池亭者、山陰右軍祠塾之別築也。祠塾始自部使者東平王公侯。按郡乘所載、蘭亭舊跡以全氏廬爲之」とある。

⁷⁴ 「厲之不如」は『春秋左氏伝』襄公二十六年に見える言葉。「厲」とは悪鬼のこと。小倉芳彦氏は「お前は〔戦死者の〕厲鬼にも及ばぬか」と訳す。岩波文庫『春秋左氏伝 中』p. 313。

らかにしないわけにはいかないだけである。

吾が祖先の泉翁は諱が璧、字は君復、太尉永堅の従父である、宋の時に秘閣官を務めたことがある。晩年に杭州の城東に遷居し、孤山社遯初子と称した。世間でも城東処士と称されて、その詩は謝臯羽の月泉吟社詩の中に見える。特に戴剡源と仲が善かった。（弟前作宋蘭亭石柱銘、其中言度宗曾以天章寺地賜吾家、易代之後始以爲書院、事在至元甲午、此勵見於吾家世譜、史志固未之載也。然剡源游蘭亭、序其於書院之役、謂以全氏廬爲之、則其說非無徵者矣。天章自宋時屬吾家、迨至元甲午乃輸官、則宋亡之次年、唐林義舉、謂非吾家共任其事不可也。蓋先泉翁固遺民、其於修竹爲同志、故是役也、不於他所而於吾家。…然竊以爲六義士當崇祀、而泉翁則可以不必、是又何也。吾家固宋室之世戚也、…國亡事去不能救、是所疚心、豈敢以此爲功、而望後世之報哉。且是天章者、故先太師徐公之墓道所在也。其因墓而以寺爲香火之院、固宋室之所賚予也、一坏之土、其又何辭、如或因畏禍而有難色、則厲之不如矣、故泉翁之共任此事、不足奇也。特其地之所屬、則不可不著明耳。先泉翁諱璧、字君復、太尉永堅之従父也、宋時曾官秘閣、晩年遷居於杭之城東、所稱孤山社遯初子者也、世亦稱爲城東處士、其詩見臯羽月泉吟社中、尤與剡源善。／全祖望「冬青義士祠祭議三與紹守杜君」、内編卷33 pp.779-780)

文章冒頭で言及されている「宋蘭亭石柱銘」は、ここまで引いてきた文章とほぼ同趣旨であるが、本節のまとめとなる部分を少しだけ参照しておこう。まず、全氏が「宋室の世戚」であったという点に関し、この「宋蘭亭石柱銘」では、「吾家三世連戚畹」と記され、そこに「一は慈憲夫人、一は福王妃、之を終えるに仁安皇后を以てす」という原注が付されている。また、「冬青の役」を「戊寅六陵之難」と称し、「其の時 先泉翁は尚お未だ杭に遷らず。其の唐林諸公に於けるは、固より吟伴なり、冬青の地主は即ち吾が家に在り」と述べている⁷⁵。

5-3. 「全祖望の記録」再考

以上のように、全祖望は冬青の役を、「戊寅」すなわち至元15年（1278）に行われたとし、自らの一族の先人である全璧も地主として参画したとする。

欧陽光氏は「与元初遺民詩社有關的一次政治活動－六陵冬青之役考述」において、発陵事件は至元21年（1284年、「甲申」）から断続的に行われ、22年（「乙酉」）に収束したとする⁷⁶。全祖望の意見が定論というわけではないのである。逆に、欧陽光氏は、至元15年（1278年、「戊寅」）説について「人を信服させるのは難しい」（p. 140）とさえ述べている。また、同じく欧陽光氏は、全璧（字は君復・君玉、号は泉翁、また遁初子）を第六の義士として取り上げ⁷⁷、全祖望の「宋蘭亭石柱銘」に言及しつつも、「ただこの説は全氏からのみ出ている、元明両代のその他の著述で見ることがない。しかも全璧は、月泉吟社でその「春

⁷⁵ 内編卷24 pp. 575-576

⁷⁶ 欧陽光『宋元詩社研究叢稿』（広東高等教育出版社、1996年）p. 141

⁷⁷ 欧陽光氏は、羅銑を義士から外しているため、全璧が6人目として扱われている。彼に対する記載は同書p. 148に見える。

日田園雜興」詩一首が存している以外、その他の文字は世に伝わっていない。林景熙・謝翱らの文集でもその唱和した作品を見ることはなく、その事跡を考証する手立てがないので、全氏のこの説は定論とすることはやはり難しい」としている。

もちろん、欧陽光氏の主張が最終的な結論というわけではないけれども、現代の学者が疑問を投げかけるような議論を全祖望が行っていたことは確認できよう。ここで欧陽光氏が疑問を投げかけた「いつ」と「誰が」の問題であるが、そこに「どこで」の問題が大きく絡んでいたこと、それが全祖望の議論に熱を帯びさせたことは、想像に難くない。つまり、冬青樹の義拳が行われた土地は「吾が家に在り」なのだから、宋の遺民であった族人・全璧もそれに係わったはずであり、彼が係わったからには、それは「戊寅」でなければならなかった。「其の時 先泉翁は尚お未だ杭に遷らず」でなくてはならないのに、邵廷采が主張する「乙酉」では、宋朝滅亡から時が経ち過ぎている。そのころには全璧は杭州の孤山に居を移していただろう。邵廷采の論を「これは本当に迂儒の言であり、論弁するまでもない」と感情的に切って捨てた原因の一つには、こういった問題が絡んでいたのかも知れない。もちろん、「吾が土地で起きたはずの義拳に地主として吾が族人が関わったはずである」という前提から、その前提が成立するうえで都合の良い「戊寅」説を全祖望は支持し、それに反する「妄言」を弄した邵廷采を非難した、と断定するのにもまた「妄言」が過ぎよう。このような「妄言」を全祖望に投げかけたならば、間違いなく、彼は即座に否定するだろう（そして、激しく罵ることであろう）。先に指摘したように、「戊寅」説は彼が敬慕して已まない黄宗羲と万斯同が唱えた主張でもあるのだから、議論の動因をもっぱら一点に絞るわけにはいかない。だが、冬青樹の義拳に関する全祖望の議論が、必ず全氏一族の話へと流れ込んでいく点に注目するならば、ここで私が述べた「妄言」にも一定の成立可能性が存するということは、あえて主張しておきたい。「その家の子弟が述べることを妄信してはいけない」とは、全祖望その人の言葉である。

私は、「場所の記憶／全祖望の記録」⁷⁸という論文において、全祖望の「同谷三先生書院記」で示された彼の思想史観をめぐり、「同谷三先生」という問題構成は、それ故、「南宋思想史」の領域には属さない。これは、南宋思想史の事実の記録ではなく、全氏一族の知的営為を継承・顕彰する記念の論文なのである」と述べ、さらに「竹洲三先生書院記」に関しても「先祖以来の濃密な記憶を有する場所との関わりという点で「同谷三先生書院記」と通底しており、寧波の先人を記念する文章のなかで、全氏一族の歩みがそれとすりあわされている点は興味深い」と指摘した⁷⁹。これらと同種の指摘を、全祖望の「冬青の役」論に対しても投げかけることが出来るはずである。「冬青の役」に関する議論に対し最終的な評定をくだす能力が私に欠けているため、確言は出来ないのだが、一族の歴史が「場所の記憶」と連動して情感をこめて語られるという点に全祖望の「記録」の特徴があるという点については、本稿に於いても実感していただけたはずである。

そして、この点に、邵廷采と全祖望の、歴史叙述に対する姿勢の違い、学者としての肌合いの違いが、鮮明に表出している、ということも言えるのではなかろうか。全祖望が「邵得魯先生事略」という文章で「邵廷采は『明遺民所知伝』という作品を作っているが、先生

⁷⁸ 『中国一社会と文化』第27号（2012年）所収

⁷⁹ 早坂俊廣「場所の記憶／全祖望の記録」p. 205、p. 208

に一言も触れていない。これは驚くほど奇怪なことであり、理解できない」と記していたことを紹介したが、「冬青の役」に関する全祖望の議論を邵廷采が目にしたならば、正反対の嘆息を漏らしたかも知れない。「記録」に対する両者の違いは、実に大きなものがあった。無理にそれを現代の言葉を用いて表現するならば、邵廷采と全祖望の違いは、HistorianとArchivistの違いであると言えるのかも知れない。もちろん、それも、そのどちらについても学的研鑽を積んだことの無い人間の、「妄言」の上塗りに過ぎないのかも知れないけれども。

終章 その後の邵廷采

前稿の冒頭で、私は次のように述べた。

要するに、邵廷采に注ぎ込む流れとしては王守仁の陽明学・良知心学と劉宗周の「證人」学・慎独誠意の学とがあり、邵廷采から発した流れは、全祖望という批判者と章学誠という賛同者を得たわけである。前者では、宋代から明代にかけて展開した「心性の学」がその本分となり、後者は、いわゆる「清代浙東史学」に属する領域である。このように、邵廷采は、明清期浙江寧紹地域における思想史の転換を体現する、学知のリトマス試験紙のような存在なのであった。⁸⁰

前稿で「前者」を、本稿で「後者」を扱ったことになる。「前者」に関し邵廷采は、朱王劉三者の思想を、些か弛緩した／希薄化された形で統合・折衷したが、それは一方で、学知がある種の汎用性を獲得して「後者」の展開を促進する、一つの契機となったのではないだろうか。本稿第4章冒頭で、李慈銘の「学問の蓄積に乏しく、その学問は確かに謝山の到達点には及ばないが、その文章の切れ味の良さは、謝山の到底及ばないものである」という邵廷采評価を紹介したが、邵廷采が全祖望に比して本当に「学問の蓄積に乏し」かったどうかは分からない。全祖望のほうが「記録」に対する執念や自己の一族に対する思いが強かったということは言えるだろうが、歴史叙述に関して邵廷采がより禁欲的、抑制的だっただけなのかも知れない。少なくとも「冬青の役」論に限って言えば、邵廷采の議論のほうが慎重かつ穏当であった、と私には思えてならない。その結論は、黄宗羲・万斯同・全祖望といった「浙東史学」の本流からは大きく外れるものであったが、逆に、このような所に彼の独自性を見いだすことも可能である。

本稿では縷々、全祖望の邵廷采批判を紹介してきたが、時代の差によって邵廷采の側には反論の機会が与えられなかった。ただ、章学誠のような賛同者は確かに存在し、それによって本稿で扱った梁啓超のような同調者も出てくることになった。何冠彪氏が紹介しているように、少なくない学者たちが邵廷采を弁護した。ある意味、これは、全祖望の批判が引き寄せたものと言えるだろう。「清代浙東史学」の殿将として名をあげられるのは、全祖望である。それに比して、「郷里でその姓氏を知る者はほとんどいない」とまで言われた邵廷采ではあるが、後世の史家にその弁護者が多くいるという事実を考えれば、邵廷采は全祖望の批

⁸⁰ 前稿 pp. 21-22

判に感謝したほうがよいのかも知れない。個々の事実認定云々よりも、学者としての肌合いの違い、歴史叙述のスタイルの違いが、全祖望の感情を逆なでしたのかも知れないが、そうしてなされた感情的な批判が却って邵廷采に好意的な論調を招いたのであれば、邵廷采にとって悪いことばかりではなかった、と考えることも可能であろう。邵廷采に於ける、「癖を正し灰汁を抜く形で」なされた「学知の転換」は、全祖望を飛び越えて、はるか後世にまで届いたのである。

（2022年4月30日受理，5月11日掲載承認）